



# 旅～記憶～そしてもう一つのテーマ



環境政策経営学科  
北崎 寛 教授

作家の太宰治は旅を好んだようである。ある日、旅に出かける太宰を玄関口でつかまえて、奥様は次のように問い合わせた。

「ね、なぜ旅に出るの?」「苦しいからさ」いかにも太宰治らしい屈託を滲ませた返事である。

私も、最近歳のせいもあるのか、旅に出たいという気持が周期的に強くなる。凡夫たる自分には、太宰のような屈折した心理がある訳ではない。旅先も旅程も凡夫らしく凡庸である。

ある程度歳をとると、誰にも忘れ得ぬ土地や風景への執着心が起きてくるようである。たとえば、数十年の時を経ても、なお心の隅っこに、いつまでも残像として居座り、未明独り目覚めたときなどに、その像が急に大きくなったりする。

私が中学・高校時代を過ごした土地の隣にO町という小さな城下町があった。私は、何度かその町に住む友人宅を訪ね、一緒に歩き回った。O町は小京都と呼ばれるように、素朴だが端正なたずまいの町であった。



10年ほど前、久しぶりにO町を訪れた。約30年ぶりのことである。昔日の記憶の作用とはこういうものであろうか。O町の美しい風物ではなく、当時その友人と数度歩いた小道を懸命に探した。かろうじて覚えていた旧友人宅を起点に、頼りない記憶の糸をたどり何度か探索を試みたが、日没が来てその時は諦めた。長い時を隔てた再訪である以上、懐かしさが小さな失望に変わることは避けがたい。漸く数年前の再々訪で、ほぼそれと思われる小道を確認することができた。

「記憶とは、自分の心のなかに自分で書き込む行為で、自分のうちに確かにとどまって、現在の自分の土壤となっているものだ」そんなことを云った詩人がいた。この詩人の言になぞらえるならば、私の小道へのこだわりは、長い時間をかけて、無意識にその記憶を耕し育てて来たことになるのだろう。

その友人は中学・高校を通して秀才であった。社会に出た後もエリートの階段を猛スピードで駆け昇った。しかし50歳を目前にして、組織と仕事の板挟みで自ら命を絶った。自裁の数ヶ月前、中也と伊藤整のなつかしい一節を添えた手紙が届いた。

『「これが私の故郷だ/さやかに風も吹いている…ああ おまへはなにをしてきたのだと/吹き来る風が私に云ふ」やはり故郷はいい。でも、いつの間にか、僕の中に雑々荒涼とした訳のわからない大都会の濁がたまり過ぎた気がする。神社から眺めた風景は今でも本当にいい。僕は都会でこんな風景を壊す手助けをしていたのかという気もしてきた。「何時か皆人が忘れたころ私は故郷へ帰り/閑古鳥のよく聞える/落葉松の林のはづれに家を建てよう」今さらちょ

っと無理かな。せめてこの人間の匂いがする町を守ってほしいものだ。…』彼は、昔から真面目で神經細やかで、弱肉強食、政治的駆け引きなど凡そ似合わない気質の人であった。返信で再会を約しながら、雑事に追われ、その約束を果たさないうちに、悲しい知らせが届いた。人生かくの如しというには、後悔が大き過ぎた。



私は、経営やビジネスを専門とする身である。ビジネスは本来「善」である。しかし、時として、その帰結が「善ならざるもの」になることもないとは云えない。彼の遺言ではないが、戻ることのできる故里、ヒトの温もりが魂を癒す情緒など、ひょっとすると、私達は知らず知らずのうちに、そんな地域と環境を自ら手放しているのかも知れない。そうならば、失われつつあるものを確固と維持継承する構想とそれを実現するビジネスがなくてはならない。

こうしたテーマは私たちの周りに多々ある。例えば、「買物弱者」や「交通弱者」の言葉に象徴されるように、少子高齢化が進行する集落の高齢者の生活インフラの確保などがその一つである。私たちが、再びまみえることができる故里が存続するためには、まず現在居住している人たちが一人でも多く住み続けていただくことが絶対条件である。一度失うと復元不能な資産を後世に引き継ぐ、そんなテーマが彼の死の側に横たわっている気がしている。

年たけて また越ゆべしと 思いきや  
命なりけり さやの中山 (西行 齡69)

## 環境問題啓発コラム

第4回

環境政策経営学科 衣川 益弘 教授

「水に流す」は過去のこと

「水に流す」とは、全ての穢れや邪悪を川などで清め流してしまうことが語源で、これは日本独特の文化だと聞いています。過去の日本は、水は清らかで目の前の汚れたものを水で洗い流しても、自然の浄化能力で河川や湖沼の水が汚れるることは無かった。今日の都市化した日本では、食べ残しをそのまま流したり、米のとぎ汁を流したり、し

ょう油やソースを流したり、また食器洗いや洗濯に使う合成洗剤など、私たちの生活が川や湖を汚染する大きな原因となっています。

例えば、お刺身皿の醤油を流すと、バスタブ1.5杯分のきれいな水で薄めてやっと魚が棲めます。牛乳コップ1杯は、バスタブ10杯を、まして天ぷら油500mlは、バスタブ300杯以上を必要とします。

食材で汚れた食器は、洗い流す前に、紙で

充分ふき取りその後、水で洗うか、汲み洗いをし、洗浄水を植栽の肥料として処理されてはいかがでしょうか。但し、塩分の多いものは避けてください。



あなたのチョッとした気遣いが、身近な河川や湖沼の汚染を守ることにつながります。